周作人の日本留学――『知堂回想録』第二巻翻訳、あわせて紹介

平川祐弘

要旨

周作人（Zhou Zuorén 1885―1967）は中国の大作家で日本研究者である。日本留学後、北京大学教授をつとめ、新文学の方向を示した多数の文章で、一時期は兄魯迅をも凌ぐ名声であった。第二次大戦中、周一家は北京にとどまったことから、対日協力のかどで戦後一時期下獄した。そして文化大革命の時に悲惨な死方をした。

ここに訳出した彼の自伝『知堂回想録』の第二巻には日露戦争直後に日本へ留学した様が実に見事な筆致で記されている。来日途中の上海での便所紙の話、辮髪を切る話の一つ一つの話を読むだけでも、文学として面白く、文化史的観察として興味深い。東京の本郷界隈で生活したが、湯島の伏見館という下宿を記録してこれほどリアルな記述は当時の日本の作家にもないのではあるまいか。微力をもかえりみず拙訳を掲載させていただく所以である。

キーワード：留学、下宿、日本研究、魯迅、周作人

紹介

周作人（Zhou Zuorén 1885—1967）は中国の大作家で日本研究者である。魯迅の四歳下の弟で、日本留学後、北京大学教授をつとめ、新文学の方向を示した多数の文章で、一時期は兄をも凌ぐ名声であった。夫人は日本人羽太信子である。第二次大戦中、周一家は北京にとどまったことから、対日協力のかどで戦後一時期下獄した。しかしその後も筆を折ることなく、落着いた調子で仕事を続けた。そのような環境の中でこれだけ自己の記憶や感性に忠実な作品を書き続けた人の内にひそむものには深い敬意を表せざるを得ない。自由に自在に自信を秘めて書いている。自伝の后序は一九六六年一月三日に書かれた。その翌年、文化大革命の最中に紅衛兵のために悲惨な死方をした。日本暦でいうと明治十八年生れ、永井荷風より六歳下で、谷崎潤一郎より一歳上である。昭和四十二年八十二歳の死亡である。

昭和四十年代の私は『和魂洋才の系譜』の執筆など留学生の文化史的意味にふれた研究に従事していたが、魯迅の日本留学にふれた文章では周作人の回憶が証言として断然価値があると感じた。というか周作人以外の魯迅論には観念先行のつまらぬものが多過ぎた。私が『クレイグ先生』と『藤野先生』について『新潮』に発表したのは一九七三年で、隣国の文化大革命はまだ収束していなかった。しかし私は中国から日本へふたたび留学生が自由に渡航してくる日には『藤野先生』も画一的な読み方とは違う読み方もされるだろう、と述べた。その予感は的中し、私ははからずもその数年後から東大その他で多数の留学生を教えることとなったばかりか、改革開放の後、自分自身三度、北京の日本学研究中心へ教えに行く身となった。厳安生教授が主任を勤めておられた頃である。貴重な体験であった。一九九二年には魯迅や周作人が育った紹興を訪ねもした。

一九九八年七月、北京日本学研究中心の仕事を終えて帰国に先立ち、私は北京の魯迅博物館を訪ねた。その時、周作人の書物も何冊か買い求めた。入口の売店で聞いたところ、兄の魯迅の書物より弟の周作人の書物の方がよく売れるとのことであった。毛沢東のお墨付きのあった魯迅は、一時期はお上が命じる必読文献であったから、誰もが読まされた。その重苦しさに飽きが来たということもあったのであろう。それに対し一時期は漢奸扱いされたが周作人だが、弟の方がいまやよく読まれ出した。周作人の文章は感覚が新鮮である。改革

開放の時代にふさわしい。感受性も観察も鋭くて、読後感は爽やかだ。留学生の趙怡さんが送ってくれた駿河台出版社のピンインがふってある中国語教科書の周作人散文選もまた文化の洗練を感じさせて好ましかった。周作人がその中で話題としていた空也餅をたまたまその随筆を読んだ直後に人から饗応にあずかったことなどふと思い出されるのである。

北京外大の同じ敷地内で片方では教えながら他方では中国語の講習に週四日出席していた私は、日本に帰国してからも、余暇があると中国人大学生にアルバイトの機会を提供すると称して中国語を習うことにつとめた。当時は大野城駅の近くに住んでいたので、九州大学大学院に通っていた薄培林さんに来てもらった。そして周作人自伝『知堂回想録』（私が依拠した版本は曹聚仁が出した初版本ではなく、敦煌文芸出版社、蘭州第一新村123号、１９９８年1月版）第二巻から読み出したのである。すなわち、あらかじめ中文の発音と意味を下調べしておいて、当日は薄老師の読み方を繰返し、意味を確かめ、授業の後で復習をかねて独りで訳文を拵えたのである。第一巻からではなく、第二巻から読み出したのは六五章「往日本去」で始まる第二巻が、日本留学の体験を書き記しているからであった。

私は西暦二〇〇〇年十月からは今度は台湾の台北の東呉大学に招かれた。その日本語日本文学大学院での私の授業負担は四種類八時間で、漱石の『それから』、江戸から明治にかけての思想史、中村正直と『西国立志編』、それにもう一つ中国語の文章を日本語に訳すという授業であった。この最後の課目は私のような者に勤まるか懸念があったのだが、その時周作人自伝の日本留学の巻を読んだら、意外にも私でも勤まることがよくわかった。中国文の解釈は中国人学生が優れているにきまっているが、それでも日本のことが書かれているので内容理解は私の方が早く勘が働くこともある。それから中文日訳の日本語の仕上げばかりはなんといっても日本語を母語とする私の方が格段に上だったからである。

ところで現在東京工業大学教授の劉岸偉氏は一九八九年に『西洋の衝撃と中日近代文化の創出と挫折――周作人と永井荷風』という論文で東大の比較文学比較文化課程から文学博士の学位を得た。私はたまたまその主査をつとめた。東大の中文関係者に異を立てる者もいたが、二年後に河出書房新社から『東洋人の悲哀――周作人と日本』の題で世に出た同書がサントリー学芸賞を受賞し、その後の劉博士の瞠目すべき仕事ぶりを見れば、この学位授与の正当性は自ずと納得されるであろう。

その劉岸偉氏は私に周作人自伝を共訳しましょうといってくれた。それで平川には実は第二巻をこのようにして訳した試訳がある、と

原稿を見せたことがある。三箇所ほど訂正してくれた。その中には「長耳不環」を「長い耳には耳輪をつけず」などの初歩的な誤りもあって赤面した。日本の女の子は「大きくなっても耳輪をつけず」の意味である。そうした次第で一人では自信はないが、共訳ならというので、ともかく私は翻訳の話を旧知の出版社に話してみたが、引受け手がいまだに見つからない。残念至極である。世間は口先とは裏腹に、本当の意味での日中文化交流にはそれほど目を向けようとはしていないのではあるまいか。郭沫若の『自伝』の日本留学記事も興味深いが、それより周作人の自伝の日本留学記事の方が文章としても観察としても記録としてもよほど価値が上であるように思われるのだが、私の贔屓目だろうか。それで日の目を見ないままで終わることがあると惜しまれるから、私の大学紀要発表の最後の機会にこの訳稿を掲げさせていただくこととした。紀要か抜刷かがどこかしかるべき出版社の人の目に留まり、劉・平川に全冊の共訳依頼の申し出でが来ないものかと心待ちする次第である。

日本には中国での政治的評価に従って、作家の評価を下すチャイナ・スクールとも呼ぶべき中国語教師がかなり多かった。先の劉論文にイデオロギー的立場から異を立てた人もそうした一人であったのだろうか。今日でもそうだが、日本の出版界関係者には書籍的知識で世界像を構築する人が多い。そのゆえか、どちらかといえばブッキッシュで閉じられた世界の中でイデオロギー的になりやすく、存外その時その時の時流に支配されてしまう。そうした人たちの中で、漢奸扱いされたが周作人をとりあげるのは勇気の要ることであり、優れた判断力と自信とが無くてはならない。時流に反して生きることは、日本のような自由な社会でも容易ではない。私は中国文学の学界事情には疎い外部の者ではあるけれども、木山英雄氏の周作人翻訳や研究がたいへん秀れていると、敬意を表しつつ参考させていただいた。真の親中派とは時の政治の動きに追随する親中派とは別の次元にいるのだと確信している。

周作人は中国人としてはじめて小泉八雲ことラフカディオ・ハーンに深い関心を寄せた人である。劉岸偉氏は中国におけるハーンの痕跡を調べているが、氏の『小泉八雲と近代中国』（東京、岩波書店、２００４）には小泉八雲と周作人の関係も再三話題とされている。私も一九九八年の秋、松江で開かれたアジア・オープン・フォーラムの席上、周作人にふれ『「漢奸」がいて「日奸」がいない理由』という中日比較論を述べたこともある。それは許光泰編『亜洲共同課題的挑戦』（台北、国立政治大学国際関係研究中心、1999, pp. 104－113）には『為何有「漢奸」而無「日奸」？――「大陸的専制」与「不同調的自由」』として掲載されている。

日本ではワープロを用いていた私が台湾へ行ったら、後から来たものが先回りして二〇〇〇年の台湾はワープロ時代を飛び越していきなりパソコンの時代にはいっていた。私は旧式のワープロを借り出して原稿を清書したはずだったが、そのワープロのディスクが見当たらない。そこで今回はパソコンのディスク作製のためにあらためて打込みながら、中国語の復習を重ねた次第である。新たに読み返しながら、日露戦争直後の東京の学生下宿の生活がこれほど鮮やかに記述された文章は日本の作家たちにも稀なのではないか、とあらためて感じた。これから日本へ行こうとする台湾の学生たちに一世紀前の周作人の日本留学記録を教材に選んで良いことをしたと感じている。

しかし周作人の生涯をたどるとき、中国語圏で日本研究者になる際は、昔も今も厳しい運命が待ち構えている、ということも感じる。複数の考え方の平和共存が認められない社会では、知識人の立場は辛い。漢奸扱いをされた人の中にはただ単に日本語ができたというだけの人もいたことであったろう。知日派と親日派との区別がつくほど分別のある中国であったとは必ずしも思えないことも多い。それは昭和初年の日貨排斥の時期も、文化大革命の時期も、平成の「憤青」が「愛国無罪」と叫ぶ時期も同じであろう。日本人女性で中国人に嫁ぐ人はそのような政治的変動の時代にかの国のマス・ヒステリアにいかに対処するかは大問題であろう。たとい周作人が名誉を回復されようとも、悪かったのは日本人の妻だ、という類の言説がかの国ではいとも容易に行なわれるのではないか、という懸念が消えないのである。複数の価値観の共存を認めないために、一方に偏しやすい中国の言論空間は異常に封建的である。不当に殺された者を後で「平反」すなわち冤罪者の名誉回復をすることも大切だが、人を不当に殺害するような前近代的なシステムそのものを改めて、精神の自由の面でも現代化を達成してもらいたいものである。それなくしては親の日中友好はありえない。毛沢東が文化大革命を発動するやすぐそれに同調した郭沫若の北京の家は記念館として保存され公開されている。だが、そんな中日友好の文化人の建物を見学させられると、人民中国では時の政権に追従しおべっかを使えば立身出世できますよ、と無言の宣伝を聞かされているようで私には不快なのだが、潔癖に過ぎる反応であろうか。

しかし周作人はそんなオポルチュニストではなかった。政治の波に左右されず、嵐よりもさらに先を見通したように平静な筆致で文章を綴っている。獄につながれる前も、獄から出た後も、文章の調子はさほど変化していない。もちろん大陸の外から周作人を支える曹聚仁のような人がいたからとはいえ、またそのような便宜は黙認されていたからとはいえ、大陸中国の内部で読者の反応を期待できぬ言語

空間の中に六十歳以後の人生を送りながら、これだけ悠々たる筆致で『知堂回想録』を書いた人が北京にいたかと思うと、その内から湧き出すものの確かさに感心せずにはいられない。周作人自伝やその拾遺がいつ書かれたか、とか自伝の内容の記述の正確性などは中国の学者たちが他の材料と突き合わせてチェックするであろうが、おおむね七十歳代の著述であろう。周作人は外に向かって開かれた、公平な観察者である。記憶力のはっきりした、いかにも頭の良い人が過去をゆったりと回想している趣がある。確立された自分のスタイルに自信を有する人の文章といえよう。書き方のスタイルについても生き方のスタイルについても揺るぎないなにかがあった。周作人は日本についても西洋についても調べたが、中国人とは何か、中国の政治とは何か、についてはさらに深い洞察のあった人のように思われる。

本稿は第二巻中六五章から七二章までの翻訳にとどまり、各章の内部でも注記したように略した箇所がある。必ずしも研究の体裁をなしてないが、以上のような事情であるので、平川が大手前大学を去るに際し、特に掲載方をお願いした次第である。

第二巻

六五　日本へ行く

今回の出発は一九〇三年秋の時とほぼ同じで、同行する人がいた。しかも紹興から日本までそのまま直行するという。それで旅行中寂しい思いをするということはなかった。この同行者は誰かというと、邵明之で別名を文鎔といい、紹興の人で、日本の北海道の札幌あたりに留学し、鉄道建設を学んだ。北海道は日本の少数民族で鬚の多いアイヌが多く住んでいる土地で、雪が多く、熊も多い。邵君は顔が丸くて黒い。またたくさん鬚を生やしていた。それで魯迅は彼に日本語で「熊爺様」という綽名をつけた。

（日本語では「様」一字を用いて、氏名の下に足して呼べば、身分の高低を問わず誰にでも通用するのでたいへん便利である。これはフランス語のムシューの略字のMと同様である。しかし中国語にはこのような適当な字がない。現在一般の公用の、たとえば税関・郵便局・銀行などの通信物には一律に姓名を敬称抜きで呼んでいるが、これは簡略に過ぎる感を免れない。しかし実は敬称付きの呼び方はもしかすると封建の遺風であるかもしれず、敬称抜きで呼び捨てにする方がかえって民主的なのかもしれない。現在学生たちの間や一般社会でその

呼び捨てが行なわれているのは、その民主的性格を証するものだろう。ただし年齢に応じて「老」の字や「小」の字を上に加えることもある。例えば「老趙」とか「小銭」とかいう呼び方である。また姓の下に「老」の字を足して尊敬を表することもある。このように見てくると似たり寄ったりの言い方があるということになるが、しかし一つのすべてに通用する言い方はない、ということである。)

魯迅は、自分自身が鉄道学校出身者でありながら、ふだんは鉄道学校の学生を馬鹿にしていた。それというのはそのクラスの連中が岩倉鉄道学校の速成班に進学したのは、目的がただ金儲けのためだけだったからである。もし高等専門学校へ進んで鉄道を学ぶのであったら、自然に別様の目で見たにちがいない。『魯迅の青年時代』に一枚写真が挿絵としてはいっている。後方に起立しているのが許寿裳と魯迅で、許寿裳の前にいるのが邵明之その人である。魯迅の前にいるのが陳公侠、すなわち後の陳儀で、一時陳毅と改名していたが、民国以後はまた元の名前に戻った。その写真を撮影した時は弘文学院を卒業したてで、それぞれ別れて高等専門学校へ進み始めたころであったろう。その後二年間の学習を経て、魯迅は医学校の前期課程の学習を終えたが、考えが変わって、人間の病苦を救済する医学から、人間の思想を改造する文芸運動に従事するようにと変わってしまった。

それで医学校退学の後一度国へ戻り、長年ほっておいた結婚問題に決着をつけ、ふたたび捲土重来で「新生」の文学活動を行なう決心をした。その時ちょうど邵君も故郷に戻っていたから、一緒に日本へ帰るという約束をしたわけである。またそのころ邵君の友人の張午楼もやはり同行することとなった。というわけで私たち一行は計四人で、みな紹興から出発することとなった。しかし二組に分かれ、紹興の西で集合する約束をし、一緒に小さな蒸気船で上海へ向かったのである。

上海に着くと、邵君の考えで、わざわざ后馬路だか五馬路だかのとある旅館に泊まった。これは普通の旅館ではなく、湖州の生糸商人がもっぱら泊まる定宿だったが、それ以外の人も泊まれるのであった。邵君にどんなつてがあったのか知らないが、こんな特権を彼は手に入れていたのである。いまではもうすっかり忘れてしまったけれども、普通の宿屋ではなかったおかげで、それだけ多少清潔で上品だったことを覚えている。ところがそこに泊まった客があまりおとなしくない連中なものだから、よその客からしきりに苦情が出た。これは実は私たちが良くないので責められるべきは私たちなのである。あの頃の私らはみな年は若く気は盛んで、自分を偉物とみなしてお高くとまっていたから、どうしても他人を見下す風を免れなかった。それで迷信を打破すると主張して、文字が印刷されている紙を大切に尊ぶのは陋習

だ、これを断然除去すると称して、いつも便所へ行くたびに必ず新聞紙を使用した。これは実に衛生に合わぬことであった。もっともこのような悪さが人々に嫌われたのは、文字が記された紙を冒涜したことが嫌われたというのは二の次で、第一は他の人も共犯者として罪を得、罰せられはしないか、とおそれたからである。それで宿の客たちは連合して抗議した。表面上はたいへん平和的で、便所用の紙を提供するから、字を印刷した紙だけは使わないでくれ、他の人がおそろしいと思うようなことはやらないでくれ、と言った。この種の内剛外柔の抗議に対しては、結局屈服するより仕方がない。それだから頑張り通すこともできなかった。事実、道理に外れていたのは我々の方だったからである。

そこにはおよそ三日から五日ほど滞在した。一つには船の切符を買うのに待たされたからだが、二つには私と張午楼は辮髪を切り落とし に行かねばならなかったからである。私の散髪はたいへん手間がかかった。当時の上海には、バリカンを持っていて、頭を剃らずに平らに刈ることのできる理髪師はただ一人しかいなかった。理髪代はただの大洋銀貨一元だったが、ただしこれには一つ条件がついていた。切り落とした辮髪は彼の所有に帰するということで、理髪師はその髪で鬘（かつら）や付け辮髪を拵えて、それでまた二、三元の利益を得ていたのである。どこぞの小旅館に住んでおり、客はそこへ出掛けて散髪をお願いした。それでもとにかく便利でさっぱりしていた。張午楼は安くすませようとして普通の床屋で頭をすっかり剃ってしまった。これは手数は省けたけれども、剃った後がつるつるに光ってまるで和尚さんのようだった。しばらく髪が生えてこなかったから、日本行きの船上で人々の注目の的となったが、これもまた一種不愉快なことであった。

六六　最初の印象

一人の人間が初めて外国の土地を踏んで、面白いととくに感じることは、その土地の人たちの特殊な生活習慣である。その人たちが一般に習得した文化的生活というものもあるが、そうしたものはその時はすこぶる新奇に感じられるにしても、しかしそれらは結局二の次のものだ。

私たちが日本へ留学に行ったのは、日本が明治維新に成功し、速やかに西洋文明を学び得たという理由からだった。しかし私たち日本留

学組の考え方も一致していたわけではなかった。ある者は日本の長所は外国の文化を吸収したというその一点だけが善いのだと見做していた。留学するのは日本人がすでに覚えた拳法を盗み取るようなもので、型通りにそれを真似ればよいのだ、と言っていた。しかし私は一種別の考え方をしている。日本が外国の文化を容易に模倣するのはもとより日本の美点の一つだが、しかし必ずしもそうだとはいえない。明治維新の後にはドイツに学んだように、現在はすべてアメリカに学んでいる。しかし学んだことには元の模範があるのだから、日本が模倣した物をわれわれが観察する必要はない。そうではなくて日本の特殊な生活習慣、すなわち日本が所有している固有な、それだけにますます注意に値するものを観察してはどうだろうか。こうした考え方は、もしかすると後でいろいろ考慮した上で決まった考えなのかもしれないが、しかし大体初めから私はこんな考え方をしていた。しかし後になって更にはっきりと決まったものではあった。

日本民族の問題となると、私は門外漢だから、いい加減な発言をしてはいけないのだが、日本人は太平洋の島々に住んでいる人種に属し大洋州系統と関係がある、といってもそれほど間違いではないだろう。日本人の根本の精神は「巫」すなわちシャーマニズムに由来する。ただし表面は漢文化と仏教文化を濃厚に受けているが、たいへん特殊な色彩があらわに出ているところが、私にはたいへん興味深く感じられるところだ。日本の国民性を、その良い行動も悪い行動もすべて了解するためには、ただ単に文学芸術という一面だけで成就された業績だけでなく、その宗教から手をつけて、中国人と同じではない日本人が抱いている宗教感情からよく気をつけて研究することが必要だ。このことは今のところは議論のしようがないから、論ぜずにおくよりいたしかたがない。ここでいうところの宗教は当然のことながら仏教ではなく、仏教以前の固有の「神道」である。この種の宗教は朝鮮満洲のシャーマニズムと同じものであることがいまでは知られている。ただし南洋の宗教との関係は調査研究が行なわれたか否かいまだに聞いていないので、私ごとき門外漢が嘴を挿むことはいよいよふさわしくない。そういうわけで私がここで述べることは、ただ一介の旅行者が日本で得たところの最初の印象にすぎない。最初のと言ったがそれがそのまま最終の印象ともなった。それというのはその方面の私の意見は終始まったく変化しなかったからである。

私が初めて東京に着いたその日は、すでに夕方だった。魯迅が寄宿していた場所、本郷湯島二丁目の伏見館という下宿屋に投宿した。これが私が日本と初めて、そして日本生活と実際に初めて接触したので、最初の印象も得たのであった。その印象はごく普通のものだが、しかしかなり深いものである。それだから私はそれ以後五十年間、ずっとその印象を少しも変更も修正もせずにきた。それは簡単に一語でい

うと、日本人は生活で天然自然を愛し、簡素を尊ぶ、ということである。私が伏見館で最初に出会った人は、館の主人の妹で下女の仕事も兼ねている千栄子だった。十五六歳の少女で、お客の荷物を運んだり、お茶を出したりしていた。特に印象的だったのは素足で家の中を行ったり来たりしていたことである。もともと中国でも江南の水郷の婦女は素足が普通だった。張汝南著すところの『江南好詞』の第九十九首にある通りで、そのことをうたって、その詞にこう出ている。

江南好、大脚果如仙。衫布裙綢腰帕翠、環銀釵玉鬢花偏。一溜走如烟。

江南は好い。大きな脚はまるで仙人のようだ。布の上着、スカートは絹、腰には緑のスカーフ。銀の腕輪に玉の簪、鬢には花を斜めに挿している。歩き去る様は烟のようだ。

その原注にこう出ている。「大きな脚をした婦女で美しい者はみな「大脚仙」と呼ばれている。その飾りつけはそのようであったから、その辺を通り過ぎた者ならみな知っている。諺にも「大脚仙人は頭に白い玉の簪をまるく挿して、顔は米の粉でかためたように白く美しい。街の通りを行くさまは烟の流れるようである。」ただしこれは街の通りを歩いて行くので、家の中の話ではない。私は一九二一年に「天足」と名づけた一短編を書いた。その第一句はこうである。

「私が見ていちばん好ましいのは女の人の素足「天足」である。」ただし後の方ではこれと逆の面のことを書いている。今まで述べてきたことをひっくり返してこう言ったからである。

「これは実は私の言っていることとは逆さまで、私が言いたいのは、私は纏足が嫌いだということなのである。[i]」

六七　日本の衣食住（上）

私は日本のふだんの暮らし方、すなわち衣食住各方面の事情に興味をもっている。これには原因がいくつもあるが、重要な理由はおよそ二つだ。その一つは私個人の性格に由来するもので、その二つは昔を偲ぶの情といってもよいものである。私は中国東南の水郷で生長した人間で、その地方では人々の生活は貧しかった。冬の日も屋内に火の気はなかった。冷たい風がそのまま布団の中に吹き込んできた。一年を通じて食べるものといえば大変辛い塩漬けの菜っ葉か、さもなくばたいへん辛い塩漬けの魚だった。そんな訓練を経てから東京へ行って下宿生活をしたので、東京の生活が合わないなどということは当然あり得なかった。それに当時の私はまた民族革命の一信奉者でもあった。およそ民族主義というものには必ず復古思想が含まれているが、私たちは清朝に反対で、清朝以前のもの、あるいは元朝以前のものであればまあなんでも好い、ましてやそれより早いものであれば更に好いと思っていた。聞くところによると、夏穂卿と銭念劬の両先生は東京の街を歩いて店の看板のとある文句やとある字体を見ては、指差して「なお唐代の遺風を存している。いまの中国には無いものだ」といつも賛嘆して言ったという。岡千仞の『観光紀游』中にも楊惺吾が帰国後こう言ったと記されている。

「惺吾は東京で手に入れた古い写本の経を雑然と並べて、手にとってもてあそびながら言った。これはまだ晋時代の筆法だ。宋元以降にはこのような真の雅致はない。」この話には十分道理があるが、しかしそれはなにも古い写本の経にかぎられた話ではない。現在の墨で書かれた字についても同じようなことは言えるのである。それだからただ単に唐代の書法の伝統が断絶していないだけでなく、筆を作る技術までもが日本ではいまだに変わっていないのである。翰林の楷書の書法を見ると、筆までが白摺紙に書くのに適合した種類のものになってしまった。それで翰林の人々が愛用した毛筆を用いて字を書くと、翰林風の字のお手本もそれに加わって、自ずとその一派のただの末流になりさがってしまうのである。

日本の生活を記録して、比較的詳細で明白で合理的なのは、黄遵憲が『日本雑事詩』の注で述べた所説を第一に推すべきだろう。その巻の下には家屋についての注にこう述べている。[ii]

六八　日本の衣食住（中）

衣服に関しては『日本雑事詩』注には女子の衣服の一部分にしか言及していない。巻二の中でこう述べている。

宮家の身なりはみな髪をひろげて肩に長く垂らす。民家の多くは古風な装いをしている。七、八歳になると髪を左右に分けて稚児髷げを結うが、たいへん素敵である。大きくなると耳には耳輪をつけず、手には腕輪をはめず、髪には花を挿さず、足には反った靴は履かない。みな赤い珊瑚の簪を挿している。出掛ける時には蝙蝠傘を持って出る。帯は幅八寸ほどの広さで、腰に二、三回巻いてから、また裏返して巻いて垂直に垂らす。まるで襁褓の赤子を背負うがごとくである。衣の袖は一尺ばかりで、襟は広くわずかに胸をのぞかせている。うなじや肩すじもすべて覆い尽しているというわけではない。おしろいで麺のごとくで、『三国志』の芝居に登場する丹や朱で身を扮した者もかくやと思われる。

またこうも言っている。

女子はまた着物の下に下穿きをはかない。下には腰巻を巻いている。これは『礼記』にいうところの「中単」で『漢書』にいうところの「中裙」である。深く蔵して足を見せない。舞を舞う時たまさかに一瞬ちらりと見えたりする。世界の五大洲で下に褲（パンツ）を穿かないのは日本だけである。聞く者は驚き怪しむが、『説文』を見てみると「袴は本来は脛の衣の意味であって、非常に雅で、両方の脚におのおの別に穿いた。いまの袴は近ごろ出来たもので、三代の昔にはもとよりなかった」と出ている。張菅疑耀は「袴は褲である」といっている。昔の人は襠がなかった。襠ができるのは漢の昭帝の時代の位の高い官女からである。『漢書』の「上官后伝」によると、官女はみな狭い袴を穿かされていた、とある。服虔がいうには、前後に襠があって相い通じることができない。これが袴に襠がつくように

なった由来であると。

この問題はその実もともとたいへん簡単である。日本の古代には中国や西洋と同じような袴があった。それは「埴輪」という土偶を見ればわかる。後に唐代の文化衣冠の改革を受けて、筒型の袴であったものが、灯篭型の袴に変わり、しまいに袴の脚はますます大きくなり、跨る部分の襠は次第に低くなり、いまの礼服でいうところの袴になった。これはもうすでにスカートのようなものである。ふだん袴を穿くと、その下にまた袴のようなものを穿くことはなくなり、男子は褌を、女子は腰巻を用いるだけでもう事は足りた。後になると民間ではふだんは「衣」は身に着けるが「裳」は穿かなくてもよいことになり、ついに下の袴ははかなくなったのである。袴は一種の礼服として用いられるようになり、学生が学校へ行く時とか先生を訪問する時とかには、和服の上に必ず袴を着用せねばならなくなった。現今いうところの和服とは実は昔の「小袖」で、その袖は狭くて袖の底は円かった。今の和服は袖が深くて広くて、まるでポケットのようである。ハンカチとか財布とかの物を入れておくことができ、和服は中国で和尚が着るものと似ている。西洋人はこれを称して Kimono というが、キモノとは日本語では「着る物」すなわち「着物」の意味で、本来は単に衣服の総称である。日本の衣裳の制はおおむねすべて中国に起源があるが、それを次第に改めていったものが今のようになったので、ことごとく日本家屋で生活するのにきわめて適するものとなった。だからもし現在、和服でもって西洋風の家に住んだり、あるいは中国服で和風の家で暮らしたら、はなはだ似つかわしくないことになるだろう。[iii]

六九　日本の衣食住（下）

日本の食生活を論ずるとなると、奇異に感じることの第一は、まちがいなく獣肉が少ないということである。四十数年前、私は三田のあたりで「山鯨」という看板を確かにまだ目にした。これは豚肉を売る店のことである。[iv] しかし牡丹を描いて猪を、紅葉で鹿をあらわすのはもう見られなかった。馬肉は桜肉と称するが、しかしそのような看板はかつて見たことがない。近年はヨーロッパ風を真似るようになったが、しかし肉食が盛んだとはいえない。それでも以前のように四つ足の肉は穢れているから禁じて食べない、などということはもうなく

なった。「江戸八百八町」のいたるところで肉屋は店を開いている。普通鳥肉や獣肉というと、鶏と豚・牛だけである。羊の肉などは売っているところもない。鵞鳥や家鴨はおよそ見かけることもない。庶民の食事のおかずは今も昔も蔬菜か魚介類である。中国の学生が初めて来日して、日本の食事を食べて、それがあっさりして、わびしくて、油気がないので、必ず大なり小なり驚き怪しむ。こうしたことは特に下宿や部屋を借りたときによくおこる。しかしこれは大目に見るべきことで、私自身はそれを苦にせず、そこに別に一種の味わいがあると感じた。

なるほど一度はこうしたこともあった。下宿の婆さんが三日にあげず揚げた丸い豆腐を出すので、これにはいささかたまらなくなって、缶詰の塩漬けの牛肉を買ってきておかずとしたこともあった。しかしこれは料理の仕方が良くなかったせいで、その揚げた丸い豆腐は原名を「雁もどき」といい、人参などを細切れにして豆腐の中にいれて作ったもので、醤油と砂糖を加えて煮ると、結構うまいのである。ところがその婆さんはもっぱら塩で煮たらしく、しかも毎日毎日それを出すものだから、それで食べるのが厭になってしまったのである。しかしそれは例外といっていいだろう。

私の郷里は貧しくて、人々は一日に三回の食事にありつこうとして一生懸命働いていた。もっぱら塩漬けの菜っ葉と臭豆腐と田螺などをおかずにしていた。それだから私は臭いものも塩辛いものも苦にしなかった。また油気がないと生きていけないということもなかった。日本へ行って食事するのはもちろんなんの問題にもならなかった。故郷のなにかと比べ得るものもいくつかあった。また中国のどこぞのなにかとそのままのものもあった。そのように考えるのはなかなか面白かった。たとえば、おすましと干菜湯、金山寺味噌と豆板醤、福神漬と醤咯噠、牛蒡独活と蘆筍、塩鮭と勒鯊、などみな相い似た食物である。また大徳寺納豆などは塩豆豉、沢庵漬は福建の黄土蘿蔔（大根）、蒟蒻は四川の黒豆腐、刺身は広東の魚生（膾）、寿司はすなわち昔の魚鮓であって、その作り方は後魏の時代の『斉民要術』に見える。その中には文化の交通の歴史もまた含まれているので、研究の資とすることもできる。

刺身という漢字は「薩西米」すなわち「さしみ」と日本語で読む。これが『日本雑事詩』注に説くところの「聶而切之」（おろしてから切った）魚の肉である。黄遵憲は広東の嘉応州の人で魚生のことを知っていた。ただしこの魚生は日本の膾と同じではない。膾は生で食べるからである。これは中国にも先例がないわけではない。酔蝦を食べるなどがそれである。刺身の魚には鮪や鯛を用いる。また鯉を用いる

者もいる。鯉のほかの骨の多い川魚はみな不適当である。

家庭の宴会はおのずと内容豊富だが、その味の淡白なことは相変わらず昔のままで、野菜や魚介類が依然として主である。鶏や豚も使わないわけではないが、しかし赤身の肉を多く用いるので脂っこい料理ではない。近ごろは社会でも中国料理や西洋料理がはやっているが、とても結構な代物とはいえない。日本のやり方で西洋の食事を調理するのだから（日本では以前は中国も西洋と呼びならわしていた）、そううまくはいかないのである。東京の神田には当初は小さな一軒の雑貨屋だったが「維新店」という店があって、浙江省の寧波の鄭さんという人が経営していた。もっぱら中国の食品を売っていた。ほぼ稲香村などと同様の店である。その小さな建物の一間を特別室に仕立てて、手軽な中国料理を食べることのできるようにした。かつてその店にお邪魔したことがある。その作り方がなかなかうまくて、四十年来大発展を遂げ、いまでは各地に分店を開いているという話だ。

日本の食物のもう一つの特色は冷たいことで、『日本雑事詩』の注に的確に述べられている通りだ。下宿ではまだ温かい御飯を出してくれるが、普通の家ではたいていは朝だけ御飯を炊く。官吏・教員・会社員・労働者・学生などがいる家では家人が皆に御飯を包んで出してくれる。名づけて「便当」という。箱の中に飯を盛り、別の仕切りにおかずを盛る。暮らし向きの上の人は魚のおかずもあるが、そうでない人は塩辛くて苦い梅干が一つか二つあるきりである。夕方帰宅してまた御飯を炊く家もあるが、中以下の家庭では朝御飯の残りを食べる。冬の夜はたいへん寒い。それで熱い苦いお茶でお茶漬けにしてさらさら食べる。中国人は火で温めたものを食べるのに慣れている。海軍の学校で共に学んだ仲間で北京で官吏となった者がいるが、熱くない飯を食べるのが口惜しくて、飯櫃を自分の側に置いて、飯櫃から飯茶碗へ、飯茶碗から口へ、疾風のごとき速さで食べた。そんなことも思い出される。これはもとより極端に相違ないが、しかしこれも一好例であるともいえる。要するに、食物に関しては、中国人は一般にたいてい熱いのが好きで、冷たいのは嫌いなのだ。だから留学生で「便当」を見て、頭が痛くならなかった者はおそらくいなかったのではあるまいか。しかし私はその便当さえ結構うまいと思った。故郷には「冷飯」をたべる習慣があるばかりか、多少古臭いことを言わせてもらうと、これもまた人生の小さな試練であったからである。中国にはたいへん陳腐だが、それでいてなかなか道理のある格言が一句ある。それは「人間は菜根を咬むことができるなら、百事をなし得る」（人如咬得菜根則百事可做）[vi]というので、生の冷たいものを食べ得るように修行することは、衛生の教えには背く点がありはしようが、刻苦の生活に耐

えることができるようになるなら、まったく無益であるとはいえないであろう。

七〇　結論

東京の話をするに及んで、話がたいへん長くなってしまった。それは日本の衣食住を論ずれば、それはおのずと結論ともなるからである。なんでそうなるのか。それは要するに結論が日本に初めて来た時に私が得た第一印象とどうしたわけか似ているからである。そうだ。最初の印象が確かにそのまま結論なのだ。これが私が多年の観察の後に得たところの結果である。いまこの文章の初めで述べたことの中には原因と結果を取り違えた誤りもいくつかあるだろう。しかしそれは仕方がないことなのだ。およそ一人の人間が一つの土地について抱く意見は、無論愛憎の如何によって変わるだろうが、ともかく根拠があって一つの結論が出ているのである。私はいまその根拠をあらかじめ示すことによって、私の事情をまた述べてみたい。そうすれば話がいますこしはっきりしてくるのではないかと思う。

率直に言って、私が東京で過ごした数ヵ年の留学生活はすこぶる愉快なものだった。下宿の家主や警察に苛められたとかいう目にはもちろん遇わなかった。ましてや魯迅が日露戦争中に中国人のスパイが殺害される様をたまたま見て刺激を受けたというような、さらに大きな国際事件にも出くわさなかった。それどころか最初の数年ほどは外部との交渉は魯迅がすべて私に代わってやってくれた。それだけにいよいよ平穏無事だったのである。これがそれだから私の日本生活に対する印象がたいへん良い理由だ。

あのころの私が日本に対して抱いていた見方は、あるいは宿命観的な色彩があったのかもしれない。私は日本はとどのつまり東アジアないしはアジア的な国であると信じていた。ところが日本人は東洋人であることだけに甘んじることをいさぎよしとしなかった。まず明治維新の後は力をつくしてドイツを学んだ。次いで昭和敗戦の後は今度はアメリカを学んだ。こうしたことはすべて日本にとって良いところはなにもない。かえってアジアに多大の災難をもたらしたのである。私がいちばん好きなのは永井荷風著わすところの『江戸芸術論』第一篇「浮世絵の鑑賞」中に述べられた次の一節である。これはもうすでに五十年前の古い話だけれども、私が言いたいことを説明してくれているので、引用したい。

余は今自己の何たるかを反省すれば、余はヴェルハアレンの如く白耳義人にあらずして日本人なりき。生れながらにして其の運命と境遇とを異にする東洋人なり。恋愛の至情はいふも更なり。異性に対する凡ての性慾的感覚を以て社会的最大の罪悪となされたる法制を戴くものたり。泣く児と地頭には勝つ可からざる事を教へられたる人間たり。物云へば唇寒きを知る国民たり。ヴェルハアレンを感奮せしめたる生血滴る羊の美肉と芳醇の葡萄酒と逞しき婦女の画も何かはせん。嗚呼余は浮世絵を愛す。苦界十年親の為に身を売りたる遊女が絵姿はわれを泣かしむ。竹格子の窓によりて唯だ茫然と流るる水を眺むる芸者の姿はわれを喜ばしむ。夜蕎麦売の行燈淋し気に残る川端の夜景はわれを酔はしむ。雨夜の月に啼く時鳥、時雨に散る木の葉、落花の風にかすれ行く鐘の音、行き暮るゝ山路の雪、およそ果敢なく頼りなく望みなく、この世は唯だ夢とのみ訳もなく嗟嘆せしむるもの悉くわれには親し、われには懐かし。

荷風の話にはあるいは消極的悲観的に過ぎる箇所があるかもしれないが、しかしこの篇の末尾に次のように書かれているのは、いかにも道理にかなっていると思われる。

日本都市の外観と社会の風俗人情は遠からずして全く変ずべし。痛ましくも米国化すべし。浅間しくも独逸化すべし。然れども日本の気候と天象と草木とは黒潮の流れにひたされたる火山質の島嶼の存するかぎり、永遠に初夏晩秋の夕陽は猩々緋の如く赤かるべし。永遠に中秋月夜の山水は藍の如く青かるべし。椿と紅梅の花に降る春の雪はまた永遠に友禅模様の染色の如く絢爛たるべし。婦女の頭髪は焼鏝をもて殊更に縮さゞる限り、永遠に水櫛の鬢の美しさを誇るに適すべし。然らば浮世絵は永遠に日本なる太平洋上の島嶼に生るゝものゝ感情に対して必ず親密なる私語を伝ふる処ある可きなり。浮世絵の生命は実に日本の風土と共に永劫なるべし。而して其の傑出せる制作品は今や挙げて尽く海外に輸出せられたり。悲しからずや。

これが著者が浮世絵を論じた文の一節だが、私がここで引用してもいかにもぴったりする。私はあのころはこのような「東洋」の環境が好きだった。それだから愉快に留学の時期を過ごすことができたのである。しかしそのような夢幻の環境も時の経過とともに破れてしまっ

た。それは私が日本研究の小店の門戸を閉じたころで、それは正式には「日本管窺之四」に発表したが、それはもはや盧溝橋事件の前夜のころであった。日本の衣食住の結論については私はなにも修正することはない。しかし日本人が宗教的国民で、感情が理性を越えている点は容易につきあえる相手ではない。これは私が以前は見誤った点だ。

七一　下宿の様子

私は最初に東京に来て、伏見館という下宿屋に住んだ。伏見館は東京の本郷湯島二丁目にある、中の下の下宿屋だ。――といっても別になにか根拠があってではなく、自分で勝手にそう評定したまでである。もともと下宿屋は一月いくらで部屋代と食事代を計算する。そこは一日いくらで計算する旅館と同じでない。そこが最大の違いだ。下宿屋それ自体の等級にいたっては大いに高下がある。大きいのは三、四階もある建物で、使用人も多い。旅館とそうした点は様子が似ている。小さな下宿屋は部屋数が十もない。一人か二人下女を使っているだけである。中には自分の家の娘をそれに当てているものもある。伏見館の様はまさにそれだった。囲いの門をはいると履物を脱ぐ場所がある。中に入ると右手に階段がある。その後ろがいわゆる帳場で店の人が住んでいる。便所と台所はその後ろの方にある。左手の外側には四畳半の部屋が二間ある。たいていこれが第一号室と第二号室である。しかしこの部屋は鬱陶しくて具合がよくないので人が住んでいることはあまりない。それでも私はある時、この一号室を借りて一月ほど住んだ。さらに後ろへ行くと便所に通じる階段があり、その後ろは風呂場である。それの後ろの一間はなんでも物を入れておく部屋である。二階の様子もほぼこのようなものだった。

二階の階段の後ろの最初の部屋は第八号室で、これは魯迅が住んでいた部屋だからはっきり憶えている。二階でたまたまお茶が欲しくなると、ベルを押す。すると階下で誰かがすぐ「八番様」と伝える。この「八番様」というのは第八号室が呼んでいるという意味だが、直訳すれば「第八号のお方」（第八号的先生）で、意味はやや違う。「様」は一種柔軟性に富む字である。それでここの中国訳に「先生」としてもまあいいのではないかと思うわけだ。第九号室は三畳の間で、ふだんいつも空いている。本来ならば比較的に貧乏な学生が住むにはそれで十分足りる。下宿人がいないはずはないのだが、しかしここは中国人専門の下宿屋だから、こんな小さい部屋に目をくれる者は誰もいな

い。一般に部屋の広さは四畳半あればまず結構だ。そこからは三階に行く階段がある。といっても実は三階には四畳半一間あるきりで、これが第十号室である。話をまた二階に戻すと、下から階段を上がって右手に部屋が一間、左手には部屋が三間つながっている。その三番目の部屋が第八号室とちょうど向かい合っている。これが第三号室から第六号室で、第七号室だけが独立した一間となっていて、便所へ行く階段と三階へ行く階段の交差する点にある。いちばんひっそりと静かで、左右に隣部屋がないから邪魔されることがない。以上述べてきた様子を見れば、私がこの下宿を中の下と判断したのは公平だったのではあるまいか。その下宿には確かに風呂場の設備はあって、毎週二、三回程度は風呂を沸かしてくれたが、しかしこれは日常の入浴で、なにも特別待遇というわけではない。そこには人を呼ぶためのベルはなく、電灯もなく、旧態然たる石油ランプを用いて照明していた。部屋のベルは乾電池式であった。高等な下宿ではどの部屋にも必ず電話がついていて、帳場に通じており、外部にも掛けることができた。以前蔣観雲が住んでいた所はそんな風であった。

下宿屋がお客さんに提供してくれるのは、部屋のほかに、火鉢が一つある。これは冬に暖(だん)を取るためだけでなく、おかげでいつも熱いお湯が沸いている。そればかりか火を点ける用にも立つ。それに茶道具一式も出してくれる。ただし客が自分用のを持っていれば、もう出してくれない。しかし自分で茶器を用意するのが面倒な人は、たいてい下宿の茶器を借用する。こうしたものの外に夜になると火をともす石油ランプ、ならびに三食に必要な食器もすべて下宿で用意してくれる。座具すなわち座布団の類いもしばらくは借りることができるが、こうしたものはどうしても必要だから、結局自分でいいように用意する。このほかに勉強机も、大小なんでも随意だが、自分で用意する。ただし一般に留学生は机と椅子の生活に慣れているから、畳の上に座ることを好まない。それで日本の部屋の中にどうしても机と椅子が要ることになる。これはでかくてひどく部屋を占めるばかりか、はなはだ不都合だ。和服を着て冬高い椅子に座ると、実際たいへん寒い。私が用いたのは日本の和机だけで、これは日本の和室によく合っている。たとい正座できないにせよ、これはあぐらをかく邪魔にはならない。しかもいつも両足を覆って座ることができるので、椅子に座って脚を垂らすより、ずっと暖かである。

部屋代と食事代は毎月十元を出なかった。昼と夜の二回の食事は御飯で、朝はパン二枚にバター、牛乳半ポンド（約二百cc）で、十分だった。ただし留学経費として支給された金はたいへん少なかった。国立大学に進学すると毎年日本円で五百円、専門学校や高等学校だと四百五十円、それ以外の学校だと一律に四百円、月に三十三円もらった。これでははなはだ手元不如意であった。しかしあのころは留学生

の管理はまことにいい加減なもので、学校へ進学するもしないも問題とせず、みな一様に学費を受取ることができた。日本のどこで勉強しているかを報告すればそれでよかった。

七二　日本語を学ぶ

私たちが伏見館に下宿して後、まず第一にしなければならなかったことは日本語の学習で、その次は文芸雑誌を出すことの準備であった。この第一件は長い時間のかかる仕事で、短時間に仕上げることのできるものではない。私が第一年目に日本語を学んだのは、ある講習会で勉強したので、それは中華留学生会館が組織してくれたものだった。向こうの誰かとこちらと顔を会わせたわけではない。参加したい人は名簿に名前を記入し、一学期いくらの学費を納めればそれでよかった。時間は毎日午前九時から十一時まで、教師の名前は菊地勉といい、年のころおよそ三十数歳で、中国語口語の白話文をすらすらと、黒板にたいへん要領よく書いたが、しかし口で話すのは日本語であった。このような教員を何人か見かけたが、そうした伎量は実際敬服に値した。教室は留学生会館内の脇の一室に設けられ、二三十人着席することができた。留学生会館は洋館で、東京市神田区駿河台にあり、これは本郷と神田の両区が交わる境にある。あのころ私たちは本郷の湯島の「御茶水橋」の近くに住んでいた。橋の一方は神田の甲賀町で、その橋のたもとを右に折れれば駿河台だった。だから下宿から授業に行くにはたいへん近くて便利だった。そこへ行くのにせいぜい十分もかからなかった。しかし私はそんなに勤勉に授業を聞きに行ったとはいえない。毎週およそ三、四回出ただけだった。一つには怠けたからだが、二つには授業の進み方がどうものろくて何回か授業を抜けたところで別にどうということはなかったからである。要するに教える側も習う側もいい加減だったのだ。

こんな風な言い方をしたが、私の多少の日本語基本知識は、菊地先生から学んだものである。しかし話がまた元に戻るようだが、それは私にはなにも用に立たなかった。それというのはあの頃は魯迅と一緒に暮らしていたので、何事もすべて魯迅が代わりにやってくれたから、私は自分では気をつかう必要はなかったからである。ふだんごくたまに一人で外出する時は、それはぶらりと日本橋丸善書店に一、二冊洋書を買いに行く時のみであった。そうした情況がそのままずっと三年間ほど続いたが、魯迅が帰国するに及んで止めになった。

講習会は私的な組織で、卒業したところで修業証書が出るわけではない。上の学校に進むには不便である。それで第二年目は一九〇七年（明治四十年）だったが、その夏またあらためて法政大学特別予科へ入学した。この種の予科は修業期限は一年で、日本語をはじめ英語・数学・歴史などやさしい科目を教えてくれた。そこで勉強した後は専門科へ進むことができる。これが大学本科へ進学するのだと、別の種類の予科があり、そこで普通の中学課程を学び、三年間を過ごさねば卒業できない。私は中学の普通知識は南京でほぼすべて学んだので、いまは日本語と日本歴史を補習すればそれで事は足りる。それでこの特別予科に進学した。この計画はなかなか合理的だったが、しかし実際はかえって不利なところがあった。

私は一応一年目の日本語は学んだし、英語や数学などの学科はみなすでに学習していたので、いまさら聞きに行く気はしなかった。それで私の怠け癖がつのり、一年分の学費は納めたが、事実上学校へ行った日数は百分の幾つにも足りなかったろう。試験の日も、学校から通知をもらったおかげで、急いで出掛けて試験を受けた。結果は受験した中で二番だった。学校で職員にばったり出会った。「あなたは遅刻して一課目試験を受けそびれたが、そうでなかったら恐らく一番だったのに」と私に代わってたいへん口惜しがってくれた。しかしおかげでそのクラスの代表となって卒業式の答辞を述べるという面倒が省けたので、学校が配ってくれた一冊の褒美の品である日本語訳のイソップの『寓話』を戴くだけで事は終わった。

こんな風に話をすると、まるでクラスの中で自分だけが大した物みたいだが、しかしこれはもちろんそうではない。ただし実際、確かに変人が幾人もいた。話すとお笑い種（ぐさ）のように聞こえるだろうが、しかしこれは本当にあった事である。英語の先生で風見という姓の人がいた。年のころは五十ぐらいで、様子はいたって神経質らしく見えた。学生にスペリングと発音を教えた。「baは賠のバ」と言った。学生はついてゆけなくて、間違って発音した。間違ったとしても、それほど違ってはいない者もいた。[vii] しかしそのクラスにとある御仁（ごじん）が一人いて、はなはだ突飛な間違いをした。先生がbaと言うと「baは羅のラ」と言ったり、「baは歪のワ」と言ったりした。先生はこれはわざとふざけているのだとみなして、はなはだ憤然とした。しかしその御仁は平然たる顔付きである。騒ぎを起こそうなどという気配は毫末もない。風見先生はついにこれが原因で辞職してしまった。日本語を教える先生が英語も兼任となり、この先生の対応の仕方はたいへん良くて、怒ったりすることはなく、それで結果は成功に終わった。

この先生はひたすら落着いて「違います。baは羅のラではありません。baは賠のバです」と静かに話した。学生が今度も「baは歪のワ」と言うと「違います。歪のワではありません。baは賠のバです」と答えた。この先生はそうした面倒臭い回答を厭がらなかったので、聞いている人々はおかしくてたまらなかったが、しかしこれが効を奏した。あの特別な発音をする人も次第に普通の発音法を会得した。あのような変わった人の変わった事、怪人怪事にその後出会ったことはない。しかしあの頃の読書人の中には、初めて書斎から解放されて出て来て、外界の事情と接触した人もいたのである。あれと類似の情景はいくらでも現出し得たのだ。魯迅は当時そうした人々を形容して「眼が石眼でこちこちに硬い」といっていつも許寿裳と一緒に罵っていたが、その「眼睛石硬」という言葉はいかにも的確で適切でぴたりと言い当てている。あれから数十年経った今、こうしたことはもう過去のことのようになってしまったかのようだ。そんな時にこんな話を持ち出しても、全部が全部信じてはもらえないだろう。辛亥革命以来のこの五十年間に社会情勢は確実に少なからず変わった。これはまことに結構なことだ。ただしそのために古い昔の事を語るとなると、どうしても手間が余計にかかり、多少余分の説明をせねばならなくなってしまったわけである。

註

i　ここに周作人の『日本之再認識』からの引用がはいるが翻訳を略。

ii　ここに黄公度（遵憲）『日本雑事詩』注からの引用と周作人の観察がはいるが翻訳を略。

iii　ここに黄公度『日本雑事詩』注からの引用と周作人の下駄などについての観察がはいるが翻訳を略。

iv　原文に「我在三田地方確実還看見過山鯨的招牌、這是売猪肉的」（p.125）とある。「山鯨」は日本では「猪の肉の異称」だが、中国語の「猪肉」は豚肉であるので、このように訳した。「牡丹」が猪の肉の隠語であるところから、「山鯨」はそれとは別の肉の隠語と周作人が錯覚したのではあるまいか。なおこの種の異称のことは黄遵憲がすでに話題としたので、周作人はそれを踏まえて議論している。六九章の始めに周作人は黄公度『日本雑事詩』注から短く引用しているがその訳も略した。このように数多い黄遵憲からの引用は、周作人が中国の数少ない先行の日本研究者の中で黄遵憲を高く評価していたことを示すものであろう。

v　敦煌文芸出版社版にはかなり多くの誤植が見られる。ここには「魚炸」とあるが「炸」は「油で揚げる」の意味であり「炸魚」は魚のフライである。「鮓」の誤植と考え、訳者平川がそのように復元した。

vi　『小学』に「汪信民言、人咬得菜根則百事可做」とある。明末の儒者洪自誠の処世哲学書『菜根譚』はこれに基づく。

vii　原文は「説ba――賠、学生跟不上、説錯了、也是有的、総不会差得很遠。」察するに風見先生は「baは賠（バイ）のバ」と発音を教えたのであろう。

ところが漢字の賠は日本語の音と違って中国語ではpeiと発音する。しかしbとpなら「間違ったとしても、それほどはちがっていない者もいた」というのではあるまいか。なお「とある御仁」の発音についての原文は「不是説ba——羅、便是説ba——歪」で平川訳は風見先生の次の先生の教え方の記述からの推定に基づく。より適切な解釈について識者の御教示を乞う。